

重度・重複障害児における コミュニケーション活動の発生と展開

Emergence and development of Communication activity in a severely handicapped child

細 瀬 富 夫

Tomio Hosobuchi

I はじめに

他者からの働きかけに対する反応が乏しい重度・重複障害児の教育においては、どのようにしてコミュニケーション活動の形成とその高次化を促すかが重要な課題になっている。多くの重度・重複障害児は名前のよびかけに振り向かず、事物の呈示にも目をむけない。では、これらの子どもにコミュニケーション活動が生じるためには、一体何が必要なのであろうか。

従来より、重度・重複障害児のコミュニケーション活動については、多くの研究がなされてきたが、必ずしも生産的な議論になっていない。研究、特に事例研究は無方向的に拡散するばかりで、理論的蓄積が乏しく、いまだにいくつかの仮説的理論が並立的な状態にある。

こうしたことの原因のひとつは、コミュニケーション概念が研究者によって一致していないことにあると思われる。この点についての詳細な検討は別稿に譲ることにして、ここでは、筆者のコミュニケーション活動についての考えを簡単に述べておきたい。

コミュニケーションの語源を遡ると、ギリシャ語の *communicare* となるが、これは *commune* とか *common* の語源と同じである。このことは、コミュニケーション活動とは、その本来の意味は情報の伝達とか交換だけではなく、そのような行為において物や意識や感情を共有することであることを示している。この点を確認しておくことは、重度・重複障害児に限らず、およそ人と人とのコミュニケーション活動を考えていくうえで重要で

あろう。なぜならば、今日コミュニケーションということばは、マス・コミュニケーションに代表されるように、一方的な情報伝達の側面のみ強調されがちだからである(沢田, 1983; 石原, 1982)。沢田や石原はおよそ外界を知覚すること一般を外界からの記号の伝達であり、コミュニケーション活動が成立しているとみなしているが、これは二重の意味で不適切である。

ひとつは、コミュニケーション活動を人以外の対象にまで拡大していることである。筆者は、コミュニケーション活動と他の高次心理機能との密接な結びつきを明らかにすることが重要であると考えているが、同時にコミュニケーション活動の特殊性に注目することも重要であるとと考えている。コミュニケーション活動の特殊性とは、コミュニケーション活動が常に他の人間の人格に向けられているということである。したがって、コミュニケーション活動の対象が主体としての他の人間とは異なる何かである場合には、コミュニケーション活動が存在するとは認められない。

ふたつめは、コミュニケーション活動における相互性、交替性、双方向性が無視されていることである。コミュニケーション活動の過程では、各人が交互にコミュニケーションの主体となったり、対象となったりする。また、一方の働きかけは、他者の共応的・応答的な行為を前提にしている。その意味で、コミュニケーション活動は「個体相互間のかかわり、働きかけのなかでとらえる」(尾関, 1983)べきである。それゆえ、コミュニケーション活動は応答的な心的能動性を持たない事物との間では成立しないし、ましてや「濡れた

庭」を見て、昨夜雨が降ったことを知るなどという一方的な知覚一般をコミュニケーションとみなすわけにはいかない。観察によって、対象から情報をえること自体をコミュニケーション活動とよぶことはできないのである。

では、個体相互間の働きかけすべてをコミュニケーションとよべるかという、そうではない。ここでは、尾関のいうように「記号による働きかけ」に限定すべきであろう。この場合の記号とは、完成された言語記号のみを意味しているわけではなく、一方の何らかの発信意図を背景としたかわりも広義の記号ととらえている。

以上の検討から、筆者はコミュニケーション活動とは「2人あるいはそれ以上の参加者たちの記号による相互志向的な活動であり、各人が主体として、個人として存在していること」ととらえたい。このようにコミュニケーション活動を規定しても、現実的には、種々の水準のコミュニケーション活動が存在するであろうが、実践的にみてもっとも困難を要するのは、初期水準のコミュニケーション活動の形成である。

そこで本研究では、発達的に極めて初期の状態にある重度・重複障害児を対象として、まずコミュニケーション活動を発生的に明らかにすることを目的とする。

II 対象児

Y・K 男児 1971年1月31日生まれ。

- (1) 医学的診断：脳性麻痺、重度精神発達遅滞。
- (2) 生育歴：妊娠中異常なし、吸引分娩、8ヶ月早産。出生時体重1,500グラム。啼泣力が弱かった。出生後すぐに保育器に収容したが、新生児黄疸が強く、9日目にT大学病院に転院し、約2ヶ月間入院した。7ヶ月時に全身性けいれんを起こし、それが4時間ほど続き、そのあと3日間眠り続けた。3歳ごろまで激しい発作が頻発、発達状態は著しく遅れた。1977年4月、国立療養所N病院重症心身障害児病棟に入院、現在に至る。

- (3) 係わり当初の状況（1982年6月）

〔行動的所見〕

① 運動機能

自力で仰臥位から座位への姿勢変換が可能

である。日常の姿勢としては、座位がもっとも多い。寝返りを利用して、回転して移動できる。時にいざり移動も見られるが、寝返りによる移動の方が多い、下肢に強い麻痺が認められるが、正座位、長座位とも可能である。

② 感覚機能

視覚については、T大学教育学部視覚欠陥学研究室の所見として、「盲」とされている

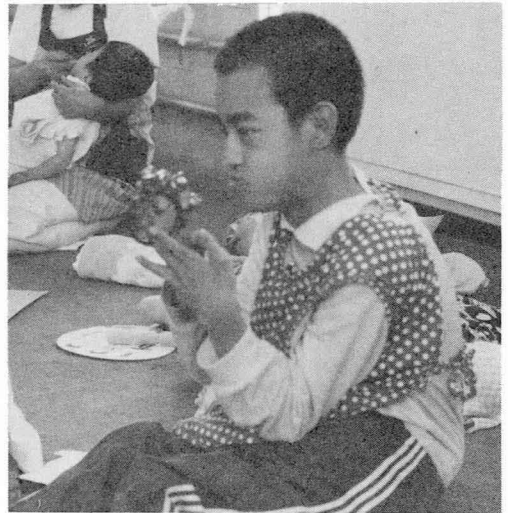


写真1 本児の鈴への固執

が生理学的に光学系としての異常はみとめられないことから、視機能の未発達によるものと考えられた（この点についての検討も行ってきたが、別稿に譲る）。人と視線を合わせることが少ない。鈴への固執がみられ、鈴に対しては注視・追視とも比較的明瞭に認められる（写真1）。他の玩具への関心は乏しく、注視が殆ど見られない。聴覚については、鈴の音、名前の呼び掛けに振り向くことがあるが、かなり不安定である。

③ 手の運動調整

眼前に鈴を呈示すると、手を伸ばしつかむつかんだ鈴はただいじりまわすだけで、特に注視しているわけではない。鈴を手にしたときには、他の玩具に興味を示さない。

④ コミュニケーション活動

時おり、「ウイ」、「アウ」といった発音はあるが、有意語はまったくなし、ただし、他者からの「ダッコ」の身振り（音声付加）に対して、両手を上に挙げて、ダッコされよ

うとする。自発的に「ダッコ」の要求をしめすことはない。ダッコして、身体をゆすってやると、時に声をあげて喜ぶ。おむつ交換時に「ゴロン」といってやると、ねころがる。

⑤ 日常生活動作

食事、排泄ともに全面介助である。

〔医学的所見〕

両上下肢ともに麻痺があるが、特に下肢の麻痺が強い。脳波検査では、両側後頭部に異常波が認められる。

III 係わりの経過

係わりは 1982年6月から 1984年6月までの2年間、原則として週1回、1回約2時間とした。しかし、本児の心身の状態変動にあわせて適宜係わりの時間を調整せざるをえなかった。

係わりの経過は、以下のように3つの時期に分される。基礎となる観察事実をVTR記録、日誌記録に基づいている。観察記録では、各時期の本児の臨床像の大まかな変化のみ述べる。各時期毎にその特徴をタイトルとして付しておいた。

〔第1期〕コミュニケーションベースの形成 (1982年6月～1983年3月)

当初より、“好きな玩具”である鈴への固執は明瞭であった。しかし、筆者(以下、Tと略す)が鈴を取り上げても、表情に変化なく、すずを探す様子もなかった。Tの存在さえ特に意識していないように思われた。取り上げた鈴を再度呈示しても、しばらくはそれに気付かないことがあり、そのことが他者には「盲」との印象を与えるようであった。

まず、Tの存在に注目させるために、ゴムひもの両端に鈴をつけ、一方の鈴をTが持ち、他方の鈴を本児に持たせた(図1)。こうしたのち、時々本児の鈴いじりに抵抗を与えるとともに、本児の行動を積極的に模倣していった。さらに、Tは本児の移動についてまわり、機会をみて、鈴と鈴をぶつけた。この過程で、Tが鈴を放して本児の鈴にあてると、非常に喜ぶことが見られるようになった。そこで、時々Tが本児のすずを引っ張って、Tの鈴にあてるようにした。

これを繰り返して行いうちに、Tが本児の鈴の

ついたひもを軽くひいて、きっかけを与えるだけで本児から鈴をぶつけてくるようになり、これは交互反響動作(柴田、1986)的な遊びとして成立するようになった。

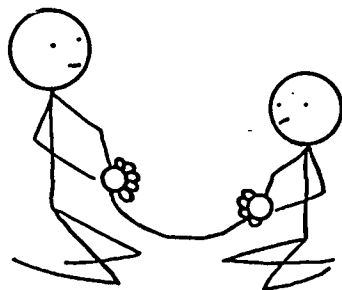


図1 反響動作による対人交流行動

その結果、本児の快の発声も盛んになり、Tへの接近行動もみられるようになった。例えば、Tの身体に触れたり、両手を挙げて「ダッコ」の要求を身振りで示したりした。

この時期の対物行動は、ほとんど鈴に限定されており、操作としては「持ちかえる」、「たたく」ことぐらいであった。しかし、鈴をたたく動作と極めて似た動作でボール、タイコをたたく行動がみられた。このような時にも、Tは本児の行動を模倣していき、交互反響動作的な遊びが成立するようになった。

以上のように、ここでは本児の安定した動作パターンを手掛かりとして、本児との間で反響動作的な遊びを作り出し、それをもとに共有・共感関係を形成していった。

〔第2期〕コミュニケーション関係の拡大 (1983年4月～1983年10月)

この時期の本児の大きな変化のひとつは、寝返り移動がほとんどみられなくなり、いざり移動が中心となり、そのスピードと量が増加したことであった。この時期の働きかけの中心は第1期で生じた快の発声パターンを手掛かりにして、本児が楽しそうにボールなどをたたいている時に、Tがこの発声を模倣していったことである。

その結果、Tが「ウイッ、ウイッ」と声かけすると、本児も「ウイッ、ウイッ」と発声し、喜びの表情を示すこともみられるようになった。同様

に、動作の面でも“本児がたたく→Tがたたく→本児がたたく”といった「同型的やりとり」が成立するようになった。また、明確ではないが、Tがバールのたたきかたを変えていくと、それにあわせて、本児がたたきかたを変えるような動きが認められた。

こうした関係の深まりのなかで、鈴を取り上げられた時の不快の表情・発声も明確にみられるようになり、鈴自体に向けられていた要求行動がTへの要求行動へと移行していった。

〔第3期〕記号的機能の発生

(1983年10月～1984年6月)

この時期、本児をだっこして身体を揺すってやったり、トランポリンにのせてゆらしたりすると、「ウイッ、ウイッ」という快の発声が多くなってきた。また、Tが他児と係わっていると、近寄ってきて、Tのかたわらにすわっていることもみられるなど、Tとの関係もより安定したものとなっていった。

そこで、Tは上記のトランポリン遊びを利用して、「ウイッ、ウイッ」という音声の記号化を促進することにした(図2)。

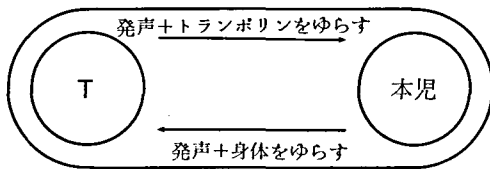


図2 コミュニケーションの場

具体的には、Tが本児を抱えてトランポリンに乗り、ゆすってやる。すると、本児の情動興奮は高まり、「ウイッ、ウイッ」と発声するので、Tと一緒に「ウイッ、ウイッ」と言って共に喜ぶのである。

この遊びを続けていくなかで、次のような工夫を行った。Tはただトランポリンをゆすり続けるのではなく、時にトランポリンをゆするのをやめて、しばらく本児の反応をうかがうのである。こうすることで、本児の情動興奮を静める。そこでTが発声と身体ゆすりのきっかけを与えてやると、

本児の方から、発声とともに身体をゆするようになった。その発声と身体ゆすりによって、Tは再びトランポリンをゆらしてやるようにした。

こうした働きかけを繰り返すうちに、次第に本児のなかで、『トランポリンをゆすってほしい』という要求が鮮明になり、発声や身体ゆすりが『トランポリンをゆすってほしい』という要求を示す行為の性格をもつようになっていったのである。

その後、本児のこうした要求は明確になっていき、要求時にTに視線をむけるなど、無方向的な要求ではなく、要求を向ける他者の存在が意識化されていく様子が見えてきた。

しかしながら、表現手段として発声を伴うことは少なくなり、身体をゆすったり、手でトランポリンを手でたたくことが多くなっていった。1984年6月時点では、手でたたくという身振りでの発信が主となっている。

また、同様の要求発信として、Tが床をトントンたたくと、近づいてきて、両手を挙げて、身を乗り出し、「ダッコ」を要求し、Tがだっこしてやると、Tの肩をトントンたたくて、『ゆすってほしい』という要求を示すことも観察されている。

本児との係わりは、これ以降も継続されたが、そこでは新たな課題が設定されているので、本稿では取り上げない。

IV 考 察

1) 対人関係活動の基盤としての交互反響動作の意義

本児は鈴という特定の事物にのみ、典型的な自己閉鎖性を示していた。しかし、視点を変えてみれば、鈴という特定の物であれ、外界への能動性の現れであり、係わりの契機となりうるものである。このきわめて限定された能動性をいかに高めていき、人や他のものへと拡大していくかが究極的な目標であった。

第1期では、本児の鈴との係わりにみられる自己閉鎖性を打開すべく、本児の持つ鈴とTの鈴とをひもで結びつけた。そのうえで、Tは本児の行動を模倣していったわけである。こうして、交互反響動作の遊びの基盤をつくりだした。

反響動作とは、新生児と母親との間にみられる

舌だし、口の開閉(Bower, 1977)などを交互に繰り返す動作であるが、これは緊張・情動の高揚を背景とした姿勢・緊張活動である。同様に、生後3ヶ月前後の乳幼児にみられる人への「おはしやぎ反応」(キスチャコフスカヤ, 1978)も反響動作的な性格を持った姿勢・緊張活動である。

Wallon (1970)によれば、こうした自・他融合的な、情動の高揚を伴った緊張活動が対人関係活動の原初型である。また、Lisina (1985)も「おはしやぎ反応」の4つの成分、すなわち、視覚的集中、微笑、発声、運動性活気を明らかにしたうえで、この「おはしやぎ反応」の発現をもって子どもと大人とのコミュニケーションの発生としている。

したがって、反応性の乏しい重度・重複障害児との係わりの初期において、こうした交互反響動作的な遊びを取り入れることは、きわめて重要な働きかけとなるように思われる。とりわけ、特定の事物への固執がみられる子どもの場合には、その事物を取り上げるのは困難であり、子どもに混乱をもたらしやすいことを考えると、固執する事物はそれとしてみとめたい。子どもに混乱をもたらさない方法としては有効であろう。本児との係わりでは、鈴と鈴をむすんだひもが、いわば“関係の糸”としての役割を果たしていたといえよう。

2) 記号的機能の発生

本児における記号的機能の発生のありさまは、働きかけとの関係では、図3のようにまとめることができるだろう。すなわち、前述のように、交

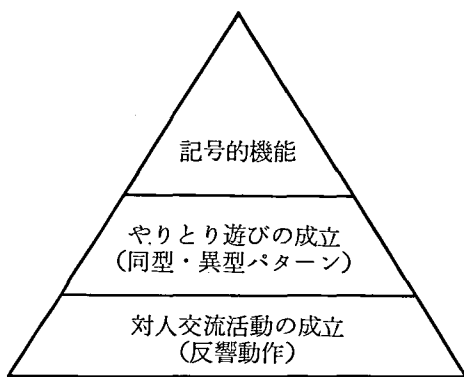


図3 記号的機能の発生過程

互反響動作的な係わりによる対人交流活動の成立を基盤にして、さらに、バルーンやボールでの同型・異型のやりとり(浜田, 1984; 岡本, 1983)を展開するなかで、記号的機能の発生をみた。

従来、重度・重複障害児のコミュニケーション活動の形成に関する実践研究では、コミュニケーション手段としての記号の形成に力を注ぐあまり、記号をピアジェが指摘したような『意味するもの一意味されるもの』の関係としてしか把握できなくなっている。それが早期からの絵カードやひらがな文字の導入を許す背景ともなっている。

しかし、上記の経過は、記号的機能が未分化な自他融合状態から情動を軸に自他が分化していく過程であることを示している。この関係を図式化すれば、図4のようになるであろう。すなわち、記号的機能はこのように情動と結びついた対人交流活動の全体状況からの分化として把握されるべきものと思われる。コミュニケーション手段としての「文字」を媒介として、言葉の獲得をうながすことに一定の有効性を認めるが、その前段階には、必ず対人交流活動が組織されているはずである。しかしながら、多くの実践研究ではこの最も重要な部分を書き落としているように思われるのである。

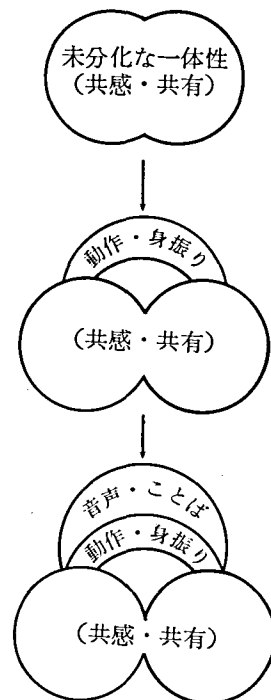


図4 コミュニケーション手段の発注と発達

3) 身振りの信号化における留意点

当初は「ウイッ、ウイッ」の発声を信号化することを試みたわけだが、結果としては、「身体ゆすり」および「手たたき」などの身振りが信号的意味を担うようになった。これは、この身振りが本児の欲求充足と結びついて生じる行為であることによる。つまり、身振りは最初は「実務的」機能しかもたない（本児の場合で言えば、快の情動を引き起こす機能）行為として現れるが、大人と子どもとの共同活動の過程で、「実務的」機能に加えて、コミュニケーション機能をも持つようになる。その際、重要なことは大人がこの身振りのきっかけを与え、その後は子ども自身の能動的な関与を促すことであろう。（受理 1988. 8. 9）

参考文献

- (1) Bower, T. G. R. (1977) : A Primer of Infant Development. Freeman & Company.
- (2) 浜田寿美男(1984) : 子どもの生活世界のはじまり。ミネルヴァ書房。
- (3) 細瀬富夫(1985) : 記号的機能の発生に関する一考察。東北心理学研究, 第30号, 17~18.
- (4) 石原岩太郎(1982) : 意味と記号の世界。誠信書房。
- (5) キスチャコフスカヤ(1978) : 0歳児の運動の発達。坂本市郎訳。新読書社。
- (6) Lisina, M. I. (1985) : CHILD-ADULT-PEE RS. Patterns of Communication. Progress Publishers.
- (7) 岡本夏木(1983) : 子どもとことば。岩波書店。
- (8) 尾関周二(1983) : 言語と人間。大月書店。
- (9) 沢田充茂(1983) : コミュニケーションと言語。旺文社。
- (10) 柴田長生・吉村夕里(1986) : 麻痺がないのに極端な運動遅滞を呈した重障児一例-Wallonの発達理論の視点から一。児童青年精神医学とその近接領域, 27(5), 1~12.
- (11) Wallon, H. (1970) : 児童における性格の起源。久保田正人訳。明治図書。